

アジア・アフリカ学術基盤形成事業セミナー実施報告書

平成 21 年 7 月 31 日

独立行政法人日本学術振興会 殿

<コーディネーター

京都大学霊長類研究所・古市 剛史>

セミナー実施報告書を次のとおり作成しましたので提出します。

セ	ミ	ナ	名	ボソウとニンバ山におけるチンパンジー研究に関するセミナー
開	催	期	間	平成 21 年 7 月 1 日 ~ 平成 21 年 7 月 2 日 (2 日間)
開	催	地		ギニア共和国ローラ県ボソウ村 ボソウ環境研究所
日本側責任者	氏	名		大橋 岳
	所属機関・職名			京都大学霊長類研究所・研究員
開催責任者 (※日本以外で開催の場合)	氏	名 (英 文)		アリ ガスパール スマ (Aly Gaspard Soumah)
	所属機関・職名 (英 文)			ボソウ環境研究所 (Environmental Research Institute of Bossou) ・所長 (General Director)
<p>セミナーの概要及び成果</p> <p>【概要】ボソウ及び近隣のニンバ山地域におけるチンパンジー研究とそれを取り巻く現状を確認した。日本側から参加した大橋は 1976 年以来、京都大学霊長類研究所グループでおこなってきたチンパンジー研究の成果を概説するとともに、今後の地域間比較研究について討議した。調査地では観光客をうけいれているが、人獣共通感染症が生じるリスクを増大させる。コンデ氏は、近年の観光客数やその収入の動向について紹介し、観光客のマスク着用などのルールを改めて確認した。また、地域住民のあいだの感染症リスクを減少させるため、村へのトイレの設置についても討議した。森林伐採や鉱山開発などはチンパンジーの生息域を脅かす。スマ氏は、ニンバ山の鉱山開発やボソウの焼畑問題の現状について報告した。ボソウの群れは現在 13 個体まで減少しており、また少子高齢化も進んでいる。分断化している生息地間でチンパンジーの往来を促進するため、「緑の回廊」プロジェクトとよぶ植林活動をおこなってきた。大橋は 1997 年よりおこなっている植林活動の経過と問題点、および新たに取入れた方法の有効性について報告した。このようなチンパンジーの保全を考えるうえで、なにより地域住民の理解が必要だ。ボニミ氏は、ボソウ近隣でおこなってきた環境教育活動について報告した。</p> <p>【成果】日本人研究者と現地調査機関、地域住民の参加により、それぞれの立場から意見を集約でき、現状把握と情報共有をすすめることができたとともに改善策を検討することができた。</p>				

○参加者

① 「参加研究者リスト」に記入されている参加者数 4 人

(「参加研究者リスト」の研究者番号を記入してください。経費負担の別により区別すること。< A : セミナー経費より負担。B : 共同研究・研究者交流経費より負担。C : 本事業経費からは負担しない。>) (形式任意)

1-2. B : 大橋 岳 (京都大学霊長類研究所・研究員)

3-2. C : Aly Gaspard Soumah (アリガスパールスマ、ボツノウ環境研究所・所長)

3-3. C : Cécé Ignace Kolie (セセイグナスコリエ、ボツノウ環境研究所・霊長類部門長)

3-4. C : Ouo-Ouo Camara (ウオウオカマラ、ボツノウ環境研究所、遺伝学部門長)

② 「参加研究者リスト」に記入されていない一般参加者数 12 人

なお、上記12人のうち、以下の2人はセミナーにて話題提供をおこなった。

C : Iba Conde (イバコンデ、ボツノウ環境研究所・副所長)

C : Soh Pletah Bonimy (ソープレタボニミ、UVODIZ (ローカル NGO 団体)・代表)

○ 日程及び課題 (セミナー関連資料があれば添付すること)





2009年7月1日(水)

13:30-14:30 ボッソウ・ニンバ地域における野生チンパンジーの生態と行動

(京都大学霊長類研究所・研究員 大橋 岳)

チンパンジーは遺伝的にみると、ヒトと最も近縁である。化石として残らない認知・行動・生態・社会をヒトはどのように進化させてきたのか。この問いに答えるために、共通祖先からわかれたチンパンジーを研究することで多くのことを類推できる。ボッソウ・ニンバ地域では1976年以

来、長期にわたってチンパンジーの継続調査がおこなわれてきた。大橋は、ボッソウ・ニンバ地域における京都大学霊長類研究所チームのチンパンジー研究の成果を報告し、現在進行中の研究を紹介した。参加者のなかにはチンパンジーの生態に詳しくない人もいたため、道具使用行動などは動画を多用して紹介した。参加者からは、チンパンジーの食物の年変動や道具使用の利き手について議論になった。チンパンジーおよび同じ *Pan* 属の



ボノボはアフリカの赤道を中心に、熱帯多雨林からサバンナウッドランドにいたる多様な環境に生息しており、それぞれの地域で様々な社会構造や道具使用を発達させて食物環境とその年変

動・季節変動に対応している。今後、これらの種の環境適応戦略の進化を地域間の比較を通じて解明していくことが重要で、これを実現するには他地域と比較可能な果実量など食物環境や気象の継続的なデータが、直接観察からえられる行動データとともに不可欠である。今年度後半に予定している実地トレーニングを通じ、ボツソウ環境研究所と京都大学霊長類研究所の協力のもと、このようなデータの持続的収集をおこなうことについて討議した。

14:30-15:30 生息地を訪問する観光客への対応と人獣共通感染症対策

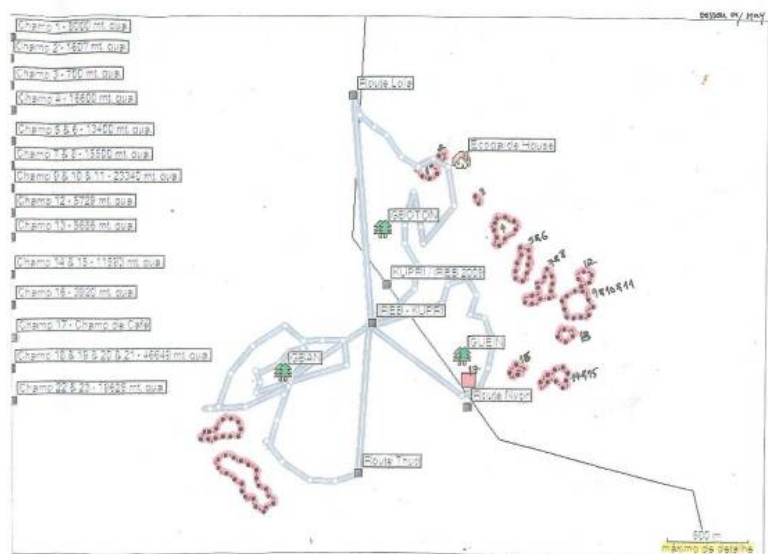
(ボツソウ環境研究所・副所長 イバコンデ)

コンデ氏は、ボツソウを訪れた観光客数と彼らへの対応について現状を報告した。観光客は2003年には32人、2004年は121人、2005年は177人、2006年は159人、2007年は180人、2008年は150人、2009年は6月末までに112人だった。観光客からは入山料として以前は1人35000ギニアフラン(約700円)、2007年11月1日から1人50000フラン(約1000円)を徴収することになっているが、観光客の多くが政府高官や外交官、「赤十字」や「国境なき医師団」などギニアへの援助を目的とした国際NGO団体に属している方々で、徴収しかねる例が多かったと報告した。入山料の50%はボツソウ村へ渡しているが、残金をボツソウ環境研究所で預かったとしても観光の運営などでつかう消耗品代でほとんど消えてしまい、保全事業などへ利用する資金を確保できないとのことだった。参加者からは、観光客のタイプによる入山料の設定を求める声上がり、今後さらに検討していくこととした。観光客は村にとって貴重な現金収入となりうる一方、ヒトとチンパンジーで共通する感染症発生のリスクを増大させる。観光客が入山するさい、チンパンジーの生態と保全の紹介と観光客が観察するときに注意事項(20メートル以上の距離をとることなど)を記したパンフレットと感染症予防のためのマスクを配ることになっている。これらについて、実際に森へ案内する現地アシスタントの声も聞き、現在でも問題なく実施されていることを確認した。

15:30-16:30 野生チンパンジーの生息地に与える脅威

(ボツソウ環境研究所・所長 アリガスパルスマ)

スマ氏はチンパンジーの生息地に脅威となりうる事例について現状を報告した。ボツソウの森林で今年焼畑がおこなわれた地域を京都大学霊長類研究所と5月に調査し、23カ所17.23ヘクタールがあらたに焼畑として利用されていることがわかった(右図参照、赤く囲ったエリアが焼畑を示す)。また、ニンバ山での鉱山開発地域を訪れたことを報告した。いずれも森林破壊のダメージとして大きい。チ



ンパンジーのモニタリングを継続していかなければならないと意見が出された。

16:30-18:00 総合討論

上記の話題提供に対する追加の質疑応答をおこなった。また、地域住民間の感染症リスクを低減させるため、トイレ建設の話題もあがった。このなかで今年はボッソウとセリンバラ、ディエケの三地域でトイレ建設をおこなったことを確認した。ボッソウでもいまだトイレは少なく、今後も適切な場所に追加すべきだという意見があがった。



20:00-21:00 映像紹介

場所を村の広場にうつし、地域住民への環境教育の一環としてビデオ上映会をおこなった。ビデオではボッソウのチンパンジーとその研究だけでなく、地域住民とチンパンジーとの共存、2003年にチンパンジーの群れで流行し5個体が死亡した呼吸器感染症問題、森林伐採、ニンバ山の鉱山開発をあつかった。上映会には数百人が参加したと思われる。上映会の前後には、今後もうまくチンパンジーと共存していくべきだと、ボニミ氏からローカル言語（マノン語）で説明をおこなった。



2009年7月2日（木）

10:00-11:00 孤立化した生息地間を植林で結ぶ「緑の回廊プロジェクト」の活動状況

（京都大学霊長類研究所・研究員 大橋 岳）

ボッソウでは多くの研究がおこなわれてきているものの、チンパンジーの個体数に目をむけると極めて存続が危ぶまれる状況にある。2009年7月現在で13個体しかおらず、少子高齢化もまた進んでいる。この原因として、他の群れからチンパンジーの移入がないことがあげられる。チンパンジーの往来を促進するため、現在チンパンジーの生息を確認しているニンバ山とボッソウのあいだのサバンナに



植林を施し森林でつなぐ「緑の回廊」プロジェクトを1997年よりおこなってきた。大橋はこれまでの経緯を説明したうえで、近況を報告した。苗木をチンパンジーの糞由来の種子から育て、

サバンナに移植してきた。一部では大きな森へと成長しているが、中央部では枯れてしまう例が多かった。このため 2007 年に東屋をサバンナにたてて苗木を守ると生存率も高く成長も早いことがわかった。また、東屋の下では、種子をじかに植えても実生を移植しても枯れずに機能することを紹介した。また、挿し木も新たな手法として簡便かつ有用であることを説明した。一度に大規模な植林を望む声もあがったが、パッチ状の小さな森を確実に作る現在の方法に理解を得た。

11:00-12:00 地域住民を対象とした環境教育活動

(UVODIZ (ローカル NGO)・代表 ソープレタボニミ)

ボニミ氏はボツウ・ニンバ地域で広域におこなっている環境教育の活動を紹介した。ボニミ氏は小学校の教師をしているかわら、ボツウ近隣域での環境教育活動をおこなってきた。しかしボツウはリベリアやコートジボワールとの国境と近く、またチンパンジーもマノン（ボツウと同じローカル言語を話す人々）も 3 カ国にわたって存在する。近年はマノンのすむ地域を中心に広域な環境教育活動をおこなっていることを説明した。最近では、ディエケの森（ボツウから約 50 キロメートル離れた森）周辺でおこなったことを紹介した。ボツウ環境研究所員は中央から派遣されている人が多く、マノン語を理解できないため、今後の活動後には今回のようなセミナーで随時発表してほしいと要望が出された。



14:00-17:00 「緑の回廊プロジェクト」植林地帯訪問

植林地帯を訪れ、実際の状況を確認した。植林地帯訪問した参加者は 8 人だったが、日本人研究者、ボツウ環境研究所の所長と副所長、ローカル NGO、チンパンジー調査助手、植林作業助手など、それぞれの立場から今後の方針について意見交換をした。樹種や植林規模について話題になったものの、最終的にはいかに野火から守るかという話題に収束した。例年、植林地帯を囲むように防火帯を準備しているが、乾季に北方から野火の侵入する例が多い。乾季前に地域を限定した野焼きをおこなうべきではないかという意見が出された。

